

Wackernagel の法則とドイツ文の文頭・文末構造

——統率・束縛理論の立場から——*

井 口 省 吾

序. 文頭・文末の統語構造と統率・束縛理論

I. いわゆる双頭分析

II. ゲルマン語の主文の基本構造としての V-(WP)-SO 型語順, 副文の基本構造としての COMP-(WP)-SOV 型語順

III. ドイツ語の文頭・文末構造を生成する様々な移動変形

序. 文頭・文末の統語構造と統率・束縛理論

ドイツの文頭と文末には, 他の言語には見られないような複雑な構造が見られる。例えば, 次のような構造がある。

(Ia) 主文の文頭構造

- 1) Renate lernt Sanskrit.
- 2) Lernt Renate Sanskrit?
- 3) Lernen Sie auch Sanskrit!
- 4) Lerne Sanskrit!
- 5) Heute lernt Renate Sanskrit.
- 6) Es regnet heute.
- 7) Der Renate graut vor der Prüfung.
- 8) Es kommen drei Professoren zu ihr.
- 9) Gelernt hat Renate Sanskrit heute nicht.
- 10) Was lernen Sie?

- 11) Was glauben Sie, daß Renate lernt?
12) Nur den christlichen Gottesacker bitte ich auszunehmen.

(1b) 主文の文末構造

- 1) Renate kauft sich ein Buch.
2) Renate hat Sanskrit gelernt.
3) Renate soll Sanskrit gelernt haben.
4) Renate soll Sanskrit müssen erlernt haben.

(2a) 副文の文頭構造

- 1) daß Renate Sanskrit lernt
2) daß sich Renate erlaubt, Sanskrit zu lernen
3) Sanskrit, das Renate lernt
4) ein Freund, mit dem Renate Sanskrit lernt.
5) als ob Renate schon Sanskrit könnte
6) als könnte Renate schon Sanskrit
7) Könnte Renate Sanskrit, dann
8) daßste kommst
9) Was glauben Sie, daß Renate lernt?
10) Klug wie er war,
11) Jetzt versteht Renate endlich Sanskrit, das zu lernen sie schon
lange gewünscht hat.

(2b) 副文の文末構造

- 1) daß Renate Sanskrit lernt
2) daß Renate Sanskrit hat lernen müssen
3) daß Renate Sanskrit wird lernen müssen
4) daß Renate gestern wird haben kommen können
5) damit Renate nicht könnte mißverstanden werden

これらの文頭・文末構造の文例を文献学的に通時的・共時的に収集し、それぞれの統計的な頻度や、コンテキストの詳細な考察から意味を類推する語学的研究は、他の諸言語に比べてドイツ語では比較的良好に行われてきている。しかし、統一的な見地からそれらを理論的に説明するのは従来から極めて困難であった。例えば、主文の Es kommen drei Professoren zu ihr と副文の daß Renate gestern wird haben kommen können の動詞・助動詞の位置について、統語論的にどのような関連があるのかということは、理論的に統一的な見地から充分説明されていないように思われる。その典型的な例は Duden 文法の Die deutschen Satzbaupläne であり、挙げられている37種の文型のあいだの統語論的な関連は殆ど説明されていない。

例えば、Karl ist Katholik と Karl ist katholisch は、それぞれが独立した文型であり、あたかも文型という形をとった思考パターンが厳然として存在し、人間の発話は好むと好まざるとに拘らず、その既製のパターンに乗せられて行われているかのような印象さえ受ける¹⁾。これは初期の分類学的な構造主義言語学の残した影響の一つであり、同じドイツ語でも現代語に見られない文型を示す古代・中世ドイツ語や、なんらかの理由で基本文型の枠からはみ出した、文学作品の創造的な統語法の理論的な解明にはこのパターン分析は役立たないだろう。

生成変形文法は、このような分類学的な文法の欠陥を埋めるべく構想された普遍的な文法理論であった。Rekursivな生成の定義に基づく句構造文法は、生成の原点となる「文を創れ」という指令から始まって、次々と現実の文を生成して行く。それらの文のあいだには、構造樹で示されるような相互関係が、派生史の形で表されている。が、残念ながら、1970年代までの生成変形文法には二つの難点があった。その一つは、精密な統語論にふさわしい精度を持った意味論が欠けていたことであり、これは現在に至るまで克服されていない。他の一つは、構造的には異なるが、意味的には近い、もしくは、きわめて近い関係にある文の間を ad hoc な、それぞ

れ独立した変形操作で関係づけようとしたために、甚だ多くの変形操作を導入せざるを得なくなったことである。しかも、それらの変形操作のあいだには相互の関連がないので、なるほど句構造の生成だけは、統一的見地から説明されているが、変形操作のほうは生成文法の忌避した分類学的な羅列になってしまったのである。

変形操作をも統一的な理論で取り扱おうとする努力は、1980年代になって精力的に始められる。この時期以降の文法理論は、そこで中心的な役割を果たす二つの概念の名をとって「統率・束縛理論 (Government-Binding Theory, Rektions-und Bindungstheorie)」と呼ばれているが、実質的には統一的な見地からする変形操作の再整備である。統語法の出発点が *rekursiv* な定義に基づく句構造規則であることは従来と変わらないが、基本的な統語範疇の中に新しく「定型動詞機能」を意味する INFL (=inflection) なる非語彙範疇が設けられ、さらに、命題文の文頭に COMP (=complementizer) と称する非語彙補文標識が設けられている。つまり、文は最初は何らかの意味の命題内容を持つ補文だと見なされている。英語では、基本構造は次のように仮定されている。

[_s' COMP [_s NP INFL [_{vp} V……]]]

COMP と INFL は語彙ではなく、統語操作上の理論的な概念であり、従来の句構造文法で生成された命題文を、現実の具体的な発言に変形させるエネルギーを生み出す起爆薬とされ、さらに、変形の過程で統語的な支柱として命題文中の語彙を引き寄せる甚だ魅力的な役割を担っている²⁹。ドイツ語では、動詞句が [_{vp} V……] のような語順ではなく、副文では [_{vp}……V] の語順を取ることで英語の基本構造そのままでは、うまく行かないであろうことが想定されるが、それについては後述する。

変形操作は、分類して個別に名前を挙げるのではなく、統一的見地から一括して「 α 移動 (=move α): 任意の語彙範疇を任意の位置に動かせ」と言う規則があるだけである。つまり、句構造文法で生成された命題文は、基

本構造 (D 構造) で表されるが、上述のように、基本構造に前もって COMP や INFL など語彙の無い空所が設定されているので、動機さえ与えれば、それらに引き寄せられて、新理論では、命題文の語彙が自動的に移動変形をし始めるのである。さらに重要なことは、COMP や INFL のみならず、動作主の消去された受動文 (例えば John is killed) を能動文から変形操作で派生させる場合には、基本構造の能動文で動作主の位置を前もって空所に設定して置き (空範彙 empty category), 空範疇は必ず同じ範疇の語彙で埋められねばならぬと規定しておく。すると他動詞文で動作主の位置が空所になっていれば、自動的に受動変形が起きることになる。即ち、次のような自動的な変形のプロセスが想定される。

- (i) [_{S'} COMP [_S [_{NP} e] INFL [_{VP} kill [_{NP} John]]]
- (ii) [_{S'} COMP [_S [_{N_{Pi}} John] INFL [_{VP} be killed [_{N_{Pi}} e]]]
- (iii) [_{S'} COMP [_S [_{N_{Pi}} John] INFL [_{VP} be killed t_i]]]

(t_i は痕跡を示す)

- (iv) John is killed.

このように既に基本構造の中に変形を促すような構造が想定されているとなると、文法理論の重点は、1) 最初にどのような基本構造を設定し、2) どのような統語単位が、3) どのような場合に、4) どのような範囲内で、5) どのように移動するか、という点に置かれる。移動の単位に関わる X-bar 理論、統語範疇の依存関係を規定する統率理論、移動の範囲を規定する境界理論、句構造の意味に関わる θ 理論、格理論などは、ややもすると無秩序に流れようとする前述の自動的な変形を秩序付ける装置の理論である。

統率・束縛理論では基本構造が設定されると、一定の動機に基づいて自動的に変形のプロセスが働き始め、様々な文が生成される。とすると、始めに掲げた多種多様なドイツ文の文頭・文末構造は、理論上、どのような基本構造から、どのような動機に基づき、どんなプロセスを経て生成され

たものであろうか。本稿は統率・束縛理論のすべての下位体系を考慮してドイツ文の全体像を描き出そうとするものではなく、二三の下位体系を援用して、ドイツ文の文頭と文末構造だけを統一的に分析して見ようとする試みに過ぎないが、それでもこの理論でかなり説得力のある説明が可能であるように思われる。ただし、基本構造その他の設定において、ドイツ文では英語とは多少異なる想定も必要である。

I. いわゆる双頭分析

英語の分析においては、基本構造を $[s' \text{ COMP } [s \text{ NP INFL } [_{VP} (V \dots)]]]$ にみられるように SVO 型の語順と想定している。ドイツ語では SVO 型を基本構造として想定すると、副文、埋め込み文の語順や、主文でも定形動詞を除く述語部の語順の生成に無理が生じるので、理論言語学ではドイツ語の基本構造を SOV 型と想定し、主文の場合にだけ文末の定形動詞を文の第二位置に移動させることにしている。ただし、何故主文の定形動詞が文頭や文の任意の位置にではなく、第二位置に移動するのかという動機の説明は不十分であった³⁾。

理論言語学で想定されているドイツ語の SOV 型基本構造は、歴史的に実証されたものではなく、全くの理論的な概念であって、Abduktion によって仮定されたものである。もしこの想定が操作上妥当でなければ修正されなければならないが、現在までのところ、多少の難点はあっても、これに代わる説得力のある仮説は見当たらなかったようである。従って、まずドイツ文の基本構造を次のようなものと想定する。

$[s' \text{ COMP } [s \text{ NP } [_{VP} \dots V] \text{ INFL (AGR)}]]$

INFL (AGR) が文末に置かれているのは、定形動詞に癒着して現れる時制・話法・呼応 (AGR) などの非語彙的要素は NP の近くではなく、VP 中の V に一番近い位置にあり、かつ、NP を統率する位置でなければならないからである。統率・束縛理論では INFL (AGR) に統率される NP

は自動的に主格を付与される。即ち、上の図式は SOV 型基本構造を統率・束縛理論によって提示したものである。

このドイツ文の基本構造の命題部分 (NP+VP) には、現代英語の基本構造とは論理意味論的にみて大きな違いがあるように思われる。ドイツ文の基本構造は高階の述語論理の形に書き直すと

$$(S = \text{主語} = \text{Operand?}) + (\text{Operator}(\text{Operator}(\cdots\cdots\{V = \text{Operator}\})))$$

(Hans) (gestern auf dem Balkon (seinen neuen Freunden (das Buch (gegeben hat))))

の形を示し、英語のそれは

$$(S = \text{主語} = \text{Operand}) + (((V = \text{Operator}) \text{ Operator}) \cdots \text{Operator})$$

(John) (((((has given) the book) to his new friends) on the balcony yesterday)

の形式を示している。つまり、現代英語の表現は先ず Argument (=Operand) を具体的に提示し、それに Funktion を付けて行くが、Funktion の内部では次第に順を追って高階になっている。ドイツ文では主語を除くと Funktion は内部で高階のものから次第に階を落としている。とすると、ドイツ文の基本構造の主語は実は Argument (=Operand) ではなく、モンタギュー文法で考えるような最高階の Operator であり、動詞句のほうが Argument ではないかという考え方も可能である⁴⁾。

$$(S = \text{主語} = \text{Operator} (\text{Operator}(\text{Operator}(\cdots\cdots\{V = \text{Operand}\}))))$$

このように、SOV 型の言語は主語を高階の内包的な述語と考える傾向のある言語であり、SVO 型の言語は主語を外延的な集合と考える傾向にある言語という解釈は、極めて興味深い解釈であるが、余りにも論理意味論的になるのでここでは深入りしない。いずれにせよ、ドイツ文では統語的に英語とは違った基本構造が想定されるべきであり、普通は Argument (=Operand) と考えられる主語が右端ではなく、Operator の位置である左端に置かれている。

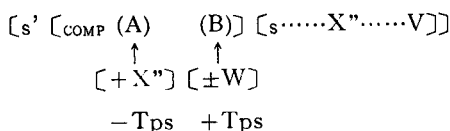
さて、1980年頃、改訂拡大標準理論 (REST), つまり考え方においては、その後に提唱された統率・束縛理論と基本的に変わりの無い文法理論に基づいた、ドイツ文の文頭構造と定動詞の位置の分析がドイツでも盛んに行われた。その際に、ドイツ語の副文の文頭には COMP なる範疇が認められるとしても、1) 主文の文頭に COMP の存在を想定するのは果して妥当であるか、と云うことと、2) もし COMP が主文・副文の文頭に想定されるとすると、ドイツ語においてはそれはどのような統語論的性質を持つか、と云うことも議論された⁵⁾。

ドイツ文の基本構造を SOV 型と想定すれば、平叙文の定動詞の位置 (V2位置)を確保する装置として、定動詞の移動先を指定しておく必要がある。また、Ja/Nein-疑問文の定動詞の位置も指定しておく必要がある。つまり、移動する定動詞の受入先として COMP を文頭に設定しておけば、定動詞の移動変形は自動的に巧く行く。しかし、困ったことに、ドイツ語平叙文の定動詞の位置は第二位置であり、文頭ではない。文頭には主語、あるいは、TOPIK が置かれている。Duden 文法の図式を使えば、次の通りである⁶⁾。

Vorfeld	1. Klammerteil	Mittelfeld	2. Klammerteil	Nachfeld
Perer	ist	schneller	gelaufen	als Frank
Gestern	ist	Peter schneller	gelaufen	als Frank
Warum	ist	Peter schneller	gelaufen	als Frank?
	Ist	Peter schneller	gelaufen	als Frank?
	,weil	Peter schneller	gelaufen ist	als Frank

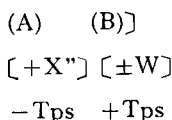
接続詞の位置や疑問文の動詞の位置などを考えると、ドイツ文でも主文に COMP の設定が必要だと思われる。が、文頭に COMP を設定すると、Vorfeld の単語までもそこに収容しなくてはならぬ羽目になる。そこで J. Lenerz が考えたのが、内部を [COMP(A) (B)] と二つに区分する双頭

(Doppelkopf) の COMP である”。それは次のように図式化される。



但し、S の内部の X'' は定型動詞以外の語彙で TOPIK 要素、 $\pm W$ は補文標識で接続詞 ($\pm W$) か、それがなければ定形動詞 (+Tps) を収容する位置、-Tps は時制形を持たない語彙。

従って、基本文構造の命題部分 $[s \cdots]$ の中に TOPIK 要素 (X'') と定型動詞 (V) があれば、それらは自動的に COMP に移動して、どちらかの枠に入ることになる。副文では接続詞が (B) を埋め、(X'') 移動は命題部 $[s \cdots]$ の境界を超えることはないとして規定しておけば、大抵のドイツ語単一文は自動的に生成される。Lernerz は上の図式を実際に適用する場合の実例と制約を次の表のように整理している。但し、() は必ず埋められるべき空所、表の中の *es*, *daß* は形式的主語 *es* 及び接続詞 *daß* で、COMP が既にそれらで埋められている場合。*印の文はドイツ語では生成不可、t は単語が移動する前の基本構造内での位置 (痕跡 trace) を示し、ルビのインデックスは同じ語彙であることを示す⁸⁾。



- a.* *es* *daß* : *es* *daß* die Mühle am rauschenden Bach klappert
- b. *es* () : *es* klappert_i die Mühle am rauschenden Bach t_i
- c.* () *daß* : die Mühle_i *daß* t_i am rauschenden Bach klappert
- d. () () : die Mühle_i klappert_j t_i am rauschenden Bach t_j
- e. × *daß* : *daß* die Mühle am rauschenden Bach klappert
- f. × () : klappert_j die Mühle am rauschenden Bach t_j
- g.* *es* × : *es* die Mühle am rauschenden Bach klappert

h. () × : (die Mühle,) die_i t_i am tauschenden Bach klappert

制約: *[_{COMP} X"][±W]], falls X" ≠ 0 (即ち TOPIK 移動は接続詞を越えてはならない)

この分析はかなり現実的ではあるが、幾つかの難点がある。形式的主語 es (文例 b) や平叙文の文頭の主語 (文例 d) は果して TOPIK と言えるのか、Ja/Nein-疑問文の文頭の定型動詞は接続詞的なのか、そもそも TOPIK は補文標識の中に納められるべきものなのか、等々である。形式的主語 es については、ドイツ文の歴史的考察から、それが元来は後続する文全体を指す文外の先行詞的なものであり、前方照応的な TOPIK には当たらないとしても、TOPIK 位置に納められてしかるべきものと Lenerz は考えているようである⁹⁾。だとすると接続詞 daß も歴史的には同じような経過を辿って出来たものなので、TOPIK 位置に納められるべきだと思われるが、daß だけは es と違って補文標識 (B) の位置に納められている。制約条件についても、これに反する次のようなドイツ文が現実存在する。

Was glauben Sie, daß Renate lernt?

Ein Weihnachtsbaum will ich doch nicht hoffen, daß es wird.

Die Fallon ist eine Frau, die wer kennt glücklich ist.

Die Franka daß du kennst, glaube ich nicht.

さらに、w-疑問文では疑問詞は TOPIK 位置に納められるのに、何故それが間接疑問文になると補文標識に納められるのかも判然としない。

M. Reis は Lenerz の双頭分析の根拠の曖昧な点、および、それに違反するドイツ文を列举して、ad hoc ではあるがと前置きして、次のような分析を代案として提出している。

- (i) 主文はすべて文頭に COMP を持たない。平叙文 (V/2-Strukturen) と zu 無しの不定詞による命令文 (V/End-Strukturen) は、COMP がなく、[X"] が文頭にあり、定動詞が文頭に立てば (=Ja/Nein 疑問文、命令文) 文頭に [X"] を付けてはならない。

- (ii) ドイツ語副文には、すべて文頭に COMP があり、動詞は文末に置かれる¹⁰⁹。

双頭分析批判に使われた M. Reis の文例の数々は大いに興味あるものであったが¹¹⁰、上の代案は何とも情けないものである。経験的な常識の線に理論が後退しているとみられても仕方があるまい。しかも、何故このような規則がドイツ文に成立するのかという動機付けが見られない完くの ad hoc な思いつきの域を超えていない。

しかしながら双頭分析における形式的主語 es を使う文での動詞の位置（例文 b）や、M. Reis の平叙文分析の中におのづから浮かび上がって来ている統語的事実、即ち、X" を [s……] の中に戻せばドイツ語主文の基本構造は実は SOV 型ではなく、動詞が文頭に立つ VSO 型で、副文の基本型だけが COMP-SOV 型ではないのか、という点に注目したい。すると、この主文・副文を区別する新しい分析は、一般に想定されているドイツ語の主文・副文を同一の基本形 COMP-SOV 型（＝副文）から派生させる分析とどのように違うのかと言うことが理論的に問題になる。

II. ゲルマン語の主文の基本構造としての V-(WP)-SO 型語順、副文の基本構造としての COMP-(WP)-SOV 型語順

現在想定されているドイツ語の SOV 型基本構造は、実は誰もがそう思っていたわけではない。ドイツ語の主文と副文の文型収集を実証的・文献学的に古代にまで遡って行っても、主文・副文のどちらにも SVO, SOV, なかには VSO 形までが散在し、資料に限りのある経験的・統計的な方法では基本型を決定する決め手が無いのが実状である。文献学的研究で言うことは、かつては定動詞の位置の自由な変動が著しかったドイツ語が、共通語や標準語が成立する過程の中で、次第に主文では SVO, 副文では SOV の語順を採るようになったと云うことだけであろう¹²⁰。

著名な実証的研究者のなかで、初めて理論的に明確にドイツ語の基本文

型に言及したのは O. Behaghel である。彼はドイツ語統語論第 4 巻のなかで語順論を展開し、ドイツ語の基本文型は SVO 型でなければならぬと主張している。それによると、意味的に密接な関係にある文肢は互いに密接な統語的近接グループを形成するものであるから、主語と述語は密接な近接グループを形成しなければならぬ、そして、述語の中の中心的な要素は定形動詞であるから、それは主語に隣接するのが当然であると云うのが理由となっている¹³⁾。

統語的近接グループの形成という考えは、現代の理論言語学でも X-bar 理論、統率理論で取り上げられている統語現象であり、妥当である。しかし、定形「動詞」が動詞句の中心であるから、と云う点では実証的な方法論の一つの限界を見るような気がする。成る程、動詞句の意味の上から言えば定形「動詞」の意味することは動詞句の要であろう。他の動詞句成分は、目的語でも、副詞規定でも、いわば修飾規定に過ぎない。だが、時制や語法を表すために助動詞が付けられている場合もそう言えるであろうか。Behaghel の論法に依れば、寧ろその場合には、助動詞の方が主語に近いので動詞句の要だと言わなくてはならなくなる。これは意味の上から見て明かに不合理である。或るときには動詞に、或るときには助動詞に表れる非語彙的な独立成分があって、それが動詞句の統語的統率者である、と考えると説明は容易になる。この要素は理論的な概念であって、実証的にこれだと指示できるものではない。理論言語学ではこの要素を抽象的に INFL/AGR (動詞の語尾変化／人称・数の一致を惹き起こす抽象的な成分)と規定して、動詞句と名詞句を統率して文を生成する重要な統語範疇だと考える。動詞は、INFL/AGR を介して主語とは間接的な関係に立つものであり、動詞は寧ろ動詞句を形成する他の文肢の方に密接に結び付いている。つまり、動詞は動詞句の中の要素であっても、統語論的に動詞句を代表するものではないのである。Behaghel の SV O 説の難点の一つは、彼が V と INFL/AGR を分離していないことである。分離すれば Behaghel の近接

理論による基本型は $S + \text{INFL/AGR} + \text{VO} (=VP)$ となろう。これは現代英語に一般的に想定されている基本型と同じである。つまり、Behaghel の考え方は、詰まるところ、現代英語の基本型からドイツ文を派生させるのと同じになる。これはおかしい。と言うのは VP (動詞句) の構造にドイツ語と英語とでは明かな違いが見られるからである。英語は $[_{VP} V \dots]$ (動詞が句頭) の語順を持ち、ドイツ語は $[_{VP} \dots V]$ (動詞が句末) の語順を持つ。これはドイツ語の助動詞を使う文、不定句、分詞句、熟語動詞句などから、経験的にも高い確率で実証されている統語的事実である。INFL/AGR を分離させて主語に隣接させ、それに動詞句を繋げるならば、寧ろ $S + \text{INFL/AGR} + \text{OV} (=VP)$ (つまり、 $S + \text{OV}$) でなければならない。OV (=VP) の内部では、Behaghel のいう近接の原理にしたがって、句末の V から左へ句頭に向かって V に対する緊密度の強いものから弱いものの順に配列されることになる。これは理論言語学で言えば、V の統御が VP 内部で左側の構成要素に向うパラメータ(統語タイプ)を持つ言語であるということになる。英語は V が右側を統御する言語である。我々はいたずらに Behaghel の原理を間違いだと言っているのではない。INFL/AGR と VP を設定した後は、寧ろ、彼の原理に従って統語基本型を考えているのである。ここで、INFL/AGR の位置に再考を要する。INFL/AGR は独立した統語成分ではあるが、非語彙的な抽象的要素であり、現実の文では必ず動詞に癒着して表れる。(助動詞を使用する文では助動詞の形をとって表れる。) 助動詞構文の成立が、歴史的にみてかなり新しいものであることを考えると、基本型の $S + \text{OV}$ 型では V に最も癒着しやすい動詞句外の位置、つまり V のすぐ右側にあるものと想定せざるを得ない。すると Behaghel の考えに INFL/AGR を導入し、彼の原理に従って基本型を考えると、 $S + \text{OV} + \text{INFL/AGR}$ 、つまり SVO とは正反対の SOV 型になるという思いがけない結果を生むのである。我々は、目下のところ、この結果に満足である。

我々が1930年代の Behaghel の考え方を修正して得た SOV+INFL/AGR 型の基本文型は、既にインド・ヨーロッパ比較言語学では「インド・ヨーロッパ語の基本文型」として早くから想定されてた。インド・ヨーロッパ諸語のなかにはケルト語のように VSO 型もあれば英・仏語のように SVO 型もあり、東方の諸言語のように SOV 型もあるので、インド・ヨーロッパ祖語の統語法を考えるとすれば、どうしても Abduktion による原型の理論的再構成という方法を取らざるを得ない。Abduktion には経験的な事実による理論の修正が付きものなので、原型の統語法も幾度かの修正を経たものであるが、1892年に発表された J. Wackernagel の論文では、インド・ヨーロッパ語に既に明確に SOV 形の基本文型を想定している¹⁴⁾。文献学的なゲルマン語学と理論的なインド・ヨーロッパ語学とのあいだの体質の違いのようなものがうかがわれる。

Wackernagel の功績の一つに、インド・ヨーロッパ祖語に想定した SOV 文型から現実のインド・ヨーロッパ諸語の文型を派生させる法則 (Das Wackernagelsche Gesetz) がある。これは『インド・ゲルマン語研究』誌第1巻第1号 (1892) を飾る100頁に余る大論文として発表され、現在の理論言語学にも影響を与えている法則である。前以て誤解を防ぐために言うておかねばならないことは、この法則は「ゲルマン語の法則」ではないと云うことである。彼は主としてギリシャ語とラテン語にみられる統語法と音韻との関係を、古代インド語をも考慮にいれながら考察し、これらの言語に見られる法則を提唱したのである。ドイツ語に関しては、論文の末尾にドイツ語の主文と副文の定形動詞の位置が違うのは、この法則の名残ではないかと随想的に述べているだけである。

さて、Wackernagel の法則とは次のようなものである。インド・ヨーロッパ祖語は主文・副文ともに SOV 型であったが、副文では文末に強勢が置かれるのが普通であり、主文では文末に強勢がなかった。(この傾向は、インド・ヨーロッパ語に限らず、どの言語にも見られ、現代ドイツ語のイ

ントネーション型にも表れている。) 主文、副文を問わず、文中の強勢を伴わない1綴り、ないし2綴りの文枝は、文頭、もしくは、それに近い最初の強勢を有する文枝に引き寄せられ、enklitisch (前倚的) に文頭の強勢語に融合したり、融合しないまでも、その直後の位置に引き寄せられていた。副文の文末にある定形動詞は強勢を帯びていたために、引き寄せられて移動することはなかったが、主文の定形動詞には強勢が無かったが為に、1綴り、ないし2綴りの短い動詞は前方に移動し、最初の強勢語と融合したり、その直後に置かれるようになった。これを図式化すれば次のようになる。

副文型 $\underline{x}xXx$ aa $\underline{x}xXxx$ b $\underline{x}Xxx$ cc dDd (下線語のXは強勢のある綴、最後は定形動詞。強勢の位置は固定していない。)

主文型 (移動前) $\underline{x}xXx$ aa $\underline{x}xXxx$ b $\underline{x}Xxx$ cc ddd .

主文型 (移動後) $\underline{x}xXx$ ($aabccddd$) $\underline{x}xXxx$ $xXxx$

インド・ヨーロッパ祖語の動詞はいわゆる語根動詞であり、1綴り(CVC)と想定されるので、移動した定形動詞は多かっただろうと思われる。Hirtを始めとして、以後の研究者の多くはドイツ語主文の動詞が第2位置に置かれるのは、この移動の名残だとしている¹⁵⁾。しかし、考えてみると移動するのは定形動詞ばかりではない。図式で($aa\ b\ cc\ ddd$)と最初の強勢語の背後にかたまって移動して来た弱い語彙のグループの中で、定形動詞は ddd であり、それが何故ドイツ語ではグループの先頭($dddaabcc$)に来るようになったのか、何故($aa\ b\ cc\ ddd$)のままではいけないのか、についての明示的な説明はない。音韻だけが移動の動機であるならば、定形動詞の先頭位置の説明はできないであろう。

我々は Wackernagel の音韻による統語法則に、当時は未だ考えられていなかった意味論的な要因を仮説として付け加えたいと思う。それは文中の主語の意味付けに変化が起り、かつての祖語では最高階の述語(関数)

として極めて内包的に考えられ、右辺の動詞句に統御されていた主語（神話的・アレゴリカルな意味が先に立つと言ってもよい）が、次第に経験的な事物の集合・性質と考えられるようになり、逆に左から右に動詞句を統御する機能を帯びて来たのではないかということである。もし、そうだとすれば、主語の右にかたまって括弧の中に収まった弱音調の語群が、主語を先頭にする〔_{VP}V……〕（現代英語と同じ）の語順を取り始めても不思議ではない。ただし、この制御の方向の変化は Wackernagel の指定した位置、即ち、Wackernagel-Position の内部だけ起こり、外部では依然として痕跡に統御された祖語の構造を残していると考える。この統御の方向の転換と云う仮定は、現代ドイツ語統語論の難問とされていた再帰代名詞の位置、代名詞 4 格・3 格の順序、文副詞 (Modalpartikeln, Modalwörter) の位置などの説明に極めて説得力のある根拠を提出してくれるだろう。Wackernagel の法則でいう最初の強勢語は主語であるとは限らない。文中の何らかの文肢が Thema として強勢を帯びて文頭に立つのは、インド・ヨーロッパ語のみならず言語一般にみられる普遍的な現象である。理論言語学では Thema は文の枠外の要素とみる。すると、文中の弱い文肢が先頭の強音調の成分に引き寄せられて移動した後の主文は次のようになろう。

〔_S "X" (=Thema) [_S INFL/AGR [V 1 2 3 [_S --- t₃ -- t₂ t₁ --- t_V]]]] (t は痕跡)

〔INFL/AGR〕は V と癒着して現れるので上の図式の、V との境界を取り払うと、

〔_S "X" (=Thema) [_S INFL/AGR · V 1 2 3 [_S --- t₃ -- t₂ - t₁ -- t_V]]〕となる。下線の部分が Wackernagel-Position である。普通は Wackernagel-Position と云えば、定形動詞の後の 1 2 3 の位置を指すが、定形動詞まで含めないと Wackernagel の移動法則に合わない。また、この Position 内で統語的・意味的な統御の方向が右辺に残された命題部と逆になるためにも、定形動詞が Position 内部にあることが必要である。

上の図式では Thema が主文で先頭にあるときに限り、インド・ヨーロッパ語では (X") VSO 型の、動詞を文頭に置く文に変わることが示されている。然し、1932年に発表された H. Kuhn の説によると、古代北歐語では Thema が先頭に無くても定形動詞が文頭に立つ平叙文が数多く見出されると言う¹⁶⁾。この定形動詞が文頭に立つ平叙文は Behaghel が余り考察していない古代北歐語の資料にもっとも多く、古期ドイツ語、古期英語にもかなり見受けられると言う。古期英語、古ザクセン語、古期ドイツ語などの西ゲルマン語の場合は、一般に文頭の定形動詞自体が Thema 的で強勢語になっていることが多いが、古代北歐語では Thema 化されていない弱音語であることも多い。Kuhn は専門のゲルマン語韻律法の知識を駆使してそれを確かめている。時代的にみると古代北歐語、特にエッダの文献資料は西ゲルマン語文献資料よりも古いので、Thema 性のある定形動詞を先頭に置く平叙文が普及する以前に、Thema 性の無い定形動詞が文頭に立つ平叙文があったとすれば、それは Wackernagel の法則に違反した現象である。そこで Kuhn は Wackernagel の法則のゲルマン語内部における変遷を詳細に辿った論文を1933年に発表し、Wackernagel の法則に基づきインド・ヨーロッパ語で最初の強勢語の後に enklitisch (前倚的) に引き寄せられた弱音調の文成分は、ゲルマン語では、最初の強勢語との融合性を解消し、次の第2番目にある強勢語に proklitisch に融合する傾向を現し始め、このパターンが最初の強勢語の前にも proklitisch な弱音調語を置く傾向を生ぜしめた、と結論付けている。Kuhn に依れば、ゲルマン語の基本構造は次のようになる。

[s, INFL/AGR・V 1 2 3 [s --- t₃ -- t₂ t₁ -- t_v]] (=VSO)

Enklisis (前倚) が Proklisis (後倚) に変わった原因は、彼によるとゲルマン語アクセント・システムの成立である。周知のごとく、インド・ヨーロッパ語では強勢語のアクセントは語によって語頭、語中、語末のいずれかにあり、同一の語でもアクセントの移動が起こりえたが、ゲルマン語ではア

クセントが一斉に語頭に移動し、そこに固定された。すると、Wackernagel の法則により最初の強勢語の後に引き寄せられ、enklitisch にそれと融合していた弱音調の語は、直前の強勢語のアクセントが語頭に移動したので融合の度合いが緩み始める。と同時に後続の強勢語の強烈な語頭アクセントに引き寄せられる傾向が見られ始める。これがゲルマン語における Proklisis の始まりである。こうして一旦 proklitisch な傾向が文中で起き、定着すると、語頭の強勢語の「前」にも proklitisch な文肢が置かれるようになり、短い定形動詞やその他の弱音調が主文の文頭に現れるようになる。弱音調の定形動詞やその他の弱音調語が、古代北欧語頭韻詩の文頭の Auftakt に多数見られるのは、ゲルマン語アクセント・システムの成立に伴う Klisis の変容に因るものであると Kuhn は述べている。つまり、ゲルマン語では Wackernagel-Position は最初の強勢語の前、文頭に移動するのである。我々はあらためて Wackernagel-Position 内部の定形動詞の位置、即ち、文頭を COMP の位置と解したいと思う。なぜなら、定形動詞はそれ自身で Wackernagel-Position 内部を統御し、痕跡を通じて命題部をも統御、即ち、直接・間接に文全体を統御する特別の機能を持ち、その左は Thema の位置で、S' の内部ではなく、副文の場合には、この定形動詞の位置に接続詞が置かれるからである。従って、Kuhn の仮説に基づいてゲルマン語の基本構造を図式化すると次のようになる。

$$[s, \left[\left[\underline{\text{INFL/AGR} \cdot V} \right] \underline{1 \ 2 \ 3} \right]_s \text{ --- } t_3 \text{ -- } t_2 \text{ -- } t_1 \text{ -- } t_v]$$

下線部が Wackernagel-Position であり、その内部の二重下線の部分が COMP である。この基本構造では COMP 位置に接続詞が置かれても、弱音調語が前方の [1 2 3] の位置に移動する可能性が残されているので、副文内部で弱音調語が前方に移動するドイツ語の語順が無理なく生成できることになる。ただし文頭に移動している弱音詞の語群を考慮すると、インド・ヨーロッパ語の基本構造から直接ドイツ語の副文は生成できない。一旦、主文の V-(WP)-SO 型にしておくことが必要である。副文は常に主文

の基本構造から生成されることになる。この仮定は、ゲルマン語では副文の形成が遅く、接続詞の形成と相俟って主文の副文化が序々に進んだ実情と一致している¹⁷⁾。COMP に接続詞が入ると、[INFL/AGR・V] は弱音調であっても元の t_v の位置に戻される。しかし、前方照応的な、Thema 化された主文の指示代名詞、指示副詞が接続詞に範疇を変換し、主文が副文に変わるプロセスはかなりの長期間を要し、文献時代まで及んでいる。そのために、指示代名詞・指示副詞であるか、接続詞であるか、範疇帰属の曖昧な時期があり、[INFL/AGR] の t_v 位置への逆戻りがうまく行かない時期がある。この現象は古期ドイツ語の文章にしばしば見られる¹⁸⁾。

さて、Auftakt に定形動詞が見られる古代北欧語の主文は、Kuhn の説に依れば、忠実にゲルマン語の基本構造を反映している文とすることになる。このような強調を伴わない定形動詞が文頭に立つ平叙文は、古期ドイツ語にも見られ、時として現代ドイツ語にも散見されるが、やはり、どことなく古い感じのするものである。他方、古期英語などに見られる定形動詞が文頭に立つ平叙文は、殆ど例外無く強勢されている。Kuhn は、強勢された定形動詞を文頭に持つ平叙文は、特に西ゲルマン語に特徴的な現象であり、定形動詞はゲルマン語の本来の位置のものではなく、Thema 化されたものと見ている¹⁹⁾。即ち、

[[s' [INFL/AGR・V] [s' [[$t_{INFL/AGR・V}$] 1 2 3]s --- t_3 -- t_2 - t_1 -- t_v]]]

とみなし、ゲルマン語の基本構造から変形を経て生成されたものとする。一般的に、古代北欧語のように Thema の無い平叙文は文献時代に入ると少なくなり、古期英語を始めとして、殆んどすべてのゲルマン方言は Thema を先置する文型を好み、文献学による分析は、動詞先置の平叙文を強調文と解するのが普通であるが²⁰⁾、ゲルマン語に、定形動詞先置の平叙文が二種類あったことは注意しておく必要があろう。

我々は Wackernagel の法則の Kuhn による修正を取り入れ、彼の提唱するゲルマン語の基本構造をドイツ語に適用し、先に挙げた多種多様なド

イツ文の文頭・文末構造がこれから自動的に生成されるかどうか、検討してみたい。

III. ドイツ語の文頭・文末構造を生成する様々な移動変形

まずドイツ文の基本構造を確認しておく。

[s" X" [s' [[INFL/AGR・V] 1 2 3] s S O]]

1) 主文の文頭構造

現代ドイツ語では普通 TOPIK の無い主文は見られない。にも拘らず双頭分析のように TOPIK を COMP の中に組み入れなかったのは、例文 6～17のように副文の中の文肢が TOPIK 化し、それが COMP を超えて上位文(S")の文頭に移動する構造があるからである。

文頭の下線の部分を総て何らかの意味で TOPIK 的とみなすと、次の文は自動的に生成される。(t は移動前の痕跡である。)

1. Renate lernt (t) Sanskrit.
2. Sanskrit lernt Renate (t).
3. Was lernen Sie (t)?
4. Renate gibt es ihm (t). (aber: Renate gibt Fritz das Buch.)

以上は名詞句の移動である。4の疑問文が Gibt es ihm Renate? でなく、普通は Gibt Renate es ihm? となるのは、他にも理由があるのかも知れないが、Renate (V) es ihm という新しい右辺統御の統語パターンが影響しているものと思われる。

5. Heute lernt Renate (t) Sanskrit.

これは副詞句の移動。

名詞句・副詞句が副文の中から COMP を超えて主文の文頭に TOPIK 移動することがある。この移動には主文や副文の動詞の種類とドイツ語の階層構造に基づく複雑な制約が伴うが、本稿ではそれについては詳述しない。

6. Was glauben Sie, daß Renate (t) lernt?
7. Die Maria denke ich schon, daß der Hans (t) heiraten wird.
8. In Hannover glaube ich nicht, daß man das (t) sagt.
9. Der Sinowatz denke ich schon, daß (t) die Wahlen gewinnen wird.
10. Wer sagt Karl, daß (t) gestern gekommen ist?
12. Die Franka, daß du (t) kennst, glaube ich nicht.
13. Der Karl, daß (t) angekommen ist, hat mich sehr gefreut.
14. Wen hast du versprochen (t) zu küssen?
15. Den Hans konnten wir Maria nicht bewegen (t) zur Party einzuladen.
16. Die Magisterarbeit anstatt (t) zu schreiben, ist Helga ins Kino gegangen.
17. Nur den christlichen Gottesacker bitte ich dich (t) auszunehmen.

この例文の中には、副文の中の要素を副文外に TOPIK 移動させることを極力制限している現今の学校独文法からみると容認しがたいようなものもあるが、G. Fanselow の見解では総て適格文である²¹⁾。14, 15, 16, 17 は COMP 無しと見られる不定詞文からの移動である。ただし、次のように副文の副文から TOPIK を抜き出すことは、たとい統語論的に可能であっても、理解の上で問題を残すであろう。

18. ?Gedichte., die der Lehrer fragte, wer_j wir dachten, daß (t)_i geschrieben hätte.
19. ?Wen glaubst du, daß ihm Maria (t) vorzustellen einen großen Spaß macht?

この場合に、主文の TOPIK 位置に既に主文の TOPIK 要素が置かれているために、副文内の TOPIK が主文の文頭に移動できず副文の COMP の前で留まっている例も見出される。

20. Ich weiß nicht, wen daß wir (t) einladen sollten.

次の文は、現代ドイツ語では関係節から TOPIK を抜き出すことが統語的に不可能なことを明かに示唆している不適格文である。

21. *Wen kennen wir einen Mann, der (t) eingestellt hat?

22. *Den Karl glaube ich die Geschichte nicht, daß Maria (t) verführen wollte.

次の例は、関係節から TOPIK を抜き出しかけた例で、南独の方言で見られるそうである。辛うじて最短距離まで抜き出せたが、適格か、不適格か、問題を残す例であろう。中世ドイツ語では関係節から TOPIK を抜き出す例は屢々見られる。

23. ?Die Fallon ist eine Frau, die wer kennt (t) glücklich ist.

次の24～32は、定形動詞・動詞句のTOPIK 化である。

24. Gelernt hat Renate heute Sanskrit nicht (t).

25. Zur Schule gegangen ist Renate nicht heute (t).

26. Der Maria einen Heiratsantrag machen wird Hans sicher (t).

27. Gefahren wird die Franka nach Venedig schon (t) sein.

28. Einen Heiratsantrag machen hat er der Fallon sicher (t) wollen.

29. Häuser gebaut sind hier schon lange nicht mehr (t) geworden.

30. Lernt (t) Renate Sanskrit?

31. Lerne (t) Sanskrit!

32. Möge (t) Renate Sanskrit lernen.

抜き出すときに、25, 26, 27, 28, 29のような場合、a) どの範囲まで抜き出さなければならないか、また、b) どの範囲まで抜き出せるか、が問題になる。これは 8, 17 の場合にも言えることである。(cf. Politiker kenne ich nur korrupte. *Korrupte kenne ich nur Politiker.) そのための規則が X-bar 理論であり、束縛理論であるが、一般的に言って、統語論的に規定された句の種類を明示する理論である。例えば、7, 25の例では、前置詞

句を内部で切り離してはならないことが示唆されているし、さらに25では、方向、規定を伴った動詞句は抜き出せることも示唆されている。しかし、この抜き出し規定は方言によって違いがあり、また、言語使用の状況によっても異なるので、甚だ複雑である。例えば、次の33は下線の部分に緊密な統語論的關係が無いので、抜き出し難いが34は可能である。

33. ?In Kyoto reden wollte er wieder mal (t) über die Grammatiktheorie.

34. Mit Hans reden wollte er wieder mal über die Grammatiktheorie (t).

動詞句に助動詞が加わると、問題はさらに複雑化するが、X-bar の統語論的・意味論的規定を細かくすることによって理論化は十分に可能である。緊密さの度合を統語論的にどのように規定するかが問題となろう。本稿では、この問題にこれ以上立ち入らない。

次の35のように、主文の中に不定詞文の形をとって埋め込まれている副文の一要素が TOPIK 移動する場合に、不定句全体を引き連れて移動するいわゆる Rattenfänger 現象は、主として関係文に見られるので、あとで副文の文頭構造について述べる際にあわせて考察する。

35. Wen zu überzeugen haben wir dem Mann (t) geraten?

残された文頭の構造の中で重要なものは、非人称主語 es の諸問題であろう。

36. Es regnet heute.

37. Es graut ihm vor ihr.

38. Es wird heute getanzt.

39. Es reiten drei Reiter zum Tor hinaus.

40. Es überrascht dich, daß ……

Grimm 以来のゲルマニスティクの伝統では、これらの非人称構文に、時として神秘的な解釈が付けられたりもしたが、事実は全く統語論的な現

象であることを喝破したのは E. Leisi であった²²⁾。我々もまた、それほど神秘的と思わない点では Leisi と同じである。es を使う非人称構文は時代を遡るにつれて少なくなり、古代北欧語には全く見られないところから、比較的新しい構文だと思われる。我々の文例では es は TOPIK の位置に置かれている。しかも、移動の痕跡は文中にない。Lenerz が双頭分析の際に es と daß を特別扱いにしているのは、それなりの理由があつてのことであつた。つまり、この二つは他の TOPIK 要素と違って、文中の成分ではなく、文外で後続する文を指す指示代名詞だったと解せられるからである²³⁾。後続文を指示する Katapher としての es の機能は先行主語、先行補足語の es として現在でも残っている。

41. Es war ein Glück, daß ich dort Renate traf.
42. Es ist mir gleichgültig, ob du mir glaubst oder nicht.
43. Es liegt nicht in meiner Macht, dir zu helfen.
44. Ich ziehe es vor, zu Hause zu bleiben.

従つて、我々は次のような基本構造を想定する。

[ez]: [s' [[INFL/AGR・V] 1 2 3] s S O] (ez>es)

[s daz]: [s' [[INFL/AGR・V] 1 2 3] s S O] (daz>daß)

先行文の文肢であつた daz>daß の場合は、後続する文と融合して次第に接続詞に変わったが、文肢を成さなかつた ez は Katapher (後方照応詞) として TOPIK 位置に残つたと解せられる。しかし他の TOPIK と違って力は弱く、強勢もなく、文中の文肢が TOPIK として新たに文頭に出されると消滅する。文中に戻されて消滅するのではなくて、TOPIK 位置で消滅するのである。この非人称の es の説明にも我々の定形動詞先置の基本統語構造は完全に機能する。

非人称の es の中で、自然現象を表す文を指示する es (=36) だけは、文中から TOPIK を生成する西ゲルマン語の基本構造 [s' X" [s' [[INFL/AGR・V] 1 2 3] s S O] に完全に吸収され、同化された結果、新たに

文中の要素が、TOPIK 化して移動して来ると、基本構造の中に位置を持っていなかったにも拘らず、命題文中に「疑似帰還」し、消滅することはない。接続詞付きの後続文を指示する es (例文40) も、殆どそれに近い統語現象を見せる。

2) 副文の文頭構造

接続詞を使用する副文では、ゲルマン語の基本構造で主文の定形動詞が占める COMP の位置に接続詞が補文標識として置かれ、定形動詞は命題部の右端の本来の位置 (tv) に戻される。インド・ヨーロッパ語の基本構造がそのまま COMP を付けることによってドイツ語の副文になるのではなく、副文の形成の遅かったゲルマン語では、主文から副文が生成されると考えるほうが妥当である。この経過は接続詞 daß の成立の歴史的事情を考察することに依って確かめることができる。45, 46, 47 は接続詞／疑問代名詞／関係代名詞が COMP 位置に侵入したために主文の定形動詞が文末に移動したことを示す珍しい方言の形であるが、COMP の位置に定形動詞の INFL/AGR だけが取り残されて接続詞と同居している例である²⁴⁾。主語の du は、言うまでもなく、-te の部分に含まれている。

45. weilste/obste/daßste endlich kommst.

46. warumste/wannste kommst ; wennste magst.

47. denste kennst/demste ähnlich siehst.

副文では文成分の統御は、主文とは違って、もはや痕跡に依らず、右端に戻った定形動詞に依って左方向に向かって行われる。

48. ob Renate Sanskrit lernt.

49. daß Renate Sanskrit lernt.

50. daß ihm Renate erlaubt, die Indienreise zu machen.

接続詞の直後に再帰代名詞や人称代名詞が現れるのは、基本構造の中に Wackernagel-Position が設けられているからであり、いわゆる Klitik-

移動が後になって作動したものではない。注意すべきは、Wackernagel-Position 内部では基本構造とは逆に、左から右への統御がなされるようになっていることである。(cf. es ihm ; ihn ihr)

格表示の衰えた現在のドイツ語では、副文の COMP を超える TOPIK 移動が制限される傾向にあるので、TOPIK 移動はせいぜいのところ副文内でしか起きない。主文・副文の何れについても文中央部の統語現象については本稿では今回は触れない。いづれにせよ、6～20のような例は極めて稀であり、人によっては理解はできてでも不適格文だとすることもある。ただし、次のような形容詞の TOPIK 化した副文は、文章語では屢々見られる。

51. Klug wie sie (t) war, lernte sie Sanskrit ohne Schwierigkeit.

wenn-Satz の wenn の省略と見られている下の52のような副文は、定形動詞が疑問文や命令文のように強い様相を帯びて TOPIK 位置に置かれ、COMP の位置が空欄になったままの、副文よりは古い形の独立主文であると考えられる。このように、定形動詞の様相が接続の機能を帯びたものに、主文の形を取る53がある。この場合の als は統語論的にはまだ TOPIK 位置に置かれた副詞である。

52. Kommt (t) sie morgen, so ist alles gut.

53. Sie zuckte die Achseln, als ginge ihr die Sache nicht an (t).
しかし、TOPIK 位置に副詞を置いたままで、COMP 内の様相だけに頼って副文の機能を果たさせるのは、機能識別の上からみて充分ではないので、54は今では不適格とされ、55、56のように COMP に接続詞が用いられるのが普通である。

54. *Selbst/Sogar/Auch/Nur hätte ich mehr Geld, würde ich mir das noch einmal überlegen.

55. Als ob ihr die Sache nicht angehe, …….

56. Selbst/Sogar/Auch/Nur wenn ich mehr Geld hätte, …….

ゲルマン語では定形動詞の強い様相が、接続詞を使わずとも接続の機能を持っていたのは、命令法や接続法の文が、主文そのままの形で副文の機能を有することからも察せられる。

57. Hilf (t) (du) dir selbst, so wird Gott dir helfen.

58. Sie sagt mir, ich sei (t) der einzige Mensch, der ihr helfen könne.

副文で重要な統語現象は、anaphorisch (前方照応) な機能を持った TOPIK 要素が接続詞に統語範疇を転換し、COMP の位置に侵入すると共に、定形動詞を文末に追い出すことである。関係代名詞、関係副詞がこれにあたる。この anaphorisch な TOPIK から転じて接続詞機能を帯びるようになったものは、未だに強い TOPIK 性を残しているので、副文中の他の要素が TOPIK 化することを妨げている。

59. Sie ist die Frau, (t) → die immer Sanskrit liest.

60. Sie ist die einzige Frau, (t) → vor der ich keine Angst habe.

61. Ich glaube die Geschichte nicht, daß Maria den Karl verführen wollte.

21. *Wen kennen wir einen Mann, der (t) eingestellt hat?

22. *Den Karl glaube ich die Geschichte nicht, daß Maria (t) verführen wollte.

TOPIK 性を持つ関係代名詞そのものは、副文の内部にある不定詞文型の副副文からでも、統語的に緊密に結び付いた文肢を伴って、COMP 位置に移動することがある (Rattenfänger 現象)。

62. Ein Mann, den ich dir (t) zu überzeugen raten würde.

63. Ein Mann, den ich dir (#) raten würde, (t) zu überzeugen dir vorzunehmen.

64. Ein Mann, den zu überzeugen dir vorzunehmen ich dir raten würde (t).

これは、副文となる文の中の一要素 (副文の含む不定詞文の中の不定詞文

の一成分)が関係代名詞として機能させられるために、TOPIK を含む副
文全体が COMP 位置に移されたものと考えられる。TOPIK にされる単
語だけを単独に移動させると、18, 19の場合のように、統語的には可能であ
っても理解の上で困難を与えるので、不定詞文形をとる副副文全体を移動
させて、大略65のごとき構文にして、理解を助けるものであろうが、発話者
にとってはともかく、聞くものにとって難儀であることには変わりはない。

65. Daß du (dir den (=ihn) zu überzeugen vornimmst), würde ich
dir raten. (TOPIK 代名詞を含む下線部を TOPIK 位置に移動、括
弧内は不定詞文として随伴)

Rattenfänger 移動はどんな副文でも可能なわけではなく、例えば、66は不
適格文となるので、副文の動詞の統語的・意味的な性質が大いに関与して
いることが判る。

66. *Der Philosoph, dem zu kommen eine hervorragende Idee (#)
anfang (t).

関係節をつくる関係代名詞・関係副詞は副文の COMP 位置にあり、副
文内での TOPIK 性をも保持しているが、さらに強い TOPIK 性をもた
せる場合には、主文の TOPIK 位置に es を Katapher として配置する。
関係代名詞・関係副詞は強い Anapher 性を持ち、関係節に課せられた統
語的制約の為に一般的に先行詞を超えて前方に移動することができないの
である。従って、照応関係は文頭の es ⇔ (関係代名詞・関係副詞) ⇔ 先行
詞という三角関係を形成する。これが普通、強調構文と呼ばれている構造
である。

67. Es ist das Gewissen, das mich jetzt peinigt.

68. Es war in Berlin, wo wir uns zuletzt begegneten.

関係文のなかには、もともと後続すべき関係文が先行していることがあ
る。中世ドイツ語では屢々見られる現象であるが²⁵⁾、現在では方言を除い
ては、不定関係代名詞 was を用いている関係文がこの現象を呈する。

69. Ich wünsche aber, was niemand einem christlichen Eheweib
(t) verargen wird, dereinst an meines Gatten Seite zu ruhen, (#).

残された副文の文頭構造は、間接疑問文の問題である。我々の分析では、すべての副文は主文から派生されると考えるので、主文の TOPIK 位置にある疑問詞が関係代名詞・関係副詞の場合と同じように、統語範疇の交換を起こし、COMP の位置に侵入して定形動詞を文末に追い戻すことになる。その場合、関係代名詞・関係副詞と同じように TOPIK 性を完全に失うことが無いので、副文内の文肢を TOPIK 化することを妨げるが、その力は Anapher (前方照応詞) をも兼ねる関係代名詞・関係副詞ほどではなく、時には副文内の文肢の TOPIK 化を見ることがある。ただし、主文の文頭の TOPIK 位置にまで移動することではなく、せいぜい副文の文頭までである。

51. Klug wie sie (t) war, lernte sie Sanskrit ohne Schwierigkeit.
18. ?Gedichte_i, die der Lehrer fragte, wer_j wir dachten, daß (t)_i
(t)_i geschrieben hätte.

関係節を形成している関係副詞の場合は、関係節に課せられた統語的な制約に触れるので、副文内の文肢は副文の COMP 位置を超えて外部で TOPIK 化することはできないが、間接疑問文の COMP 位置にある疑問接続詞そのものは TOPIK 性を持てるので、時として主文の TOPIK 位置にまで移動することがある。その場合に空所となる副文の TOPIK 位置に接続詞を補充する。しかし現在では英語のように副文の COMP 位置に接続詞を補充せず、主文を副文の Wackernagel-Position に文副詞のように挿入することが一般的になりつつあるが、副文はこの場合でも副文の語順を変えない。

6. Was glauben Sie, daß Renate (t) lernt?
19. Wen glaubst du, daß ihm Maria (t) vorzustellen einen großen Spaß macht?

70. Was, glauben Sie, Renate lernt?

71. Wen, glaubst du, ihm Maria vorzustellen einen großen spaß macht?

以上の分析はすべての文頭構造を網羅していないかも知れないが、Lernerz 流の双頭分析から TOPIK を引き離し、Wackernagel-Position を統語論の中に組み入れ、さらに Wackernagel-Position 内部での新しい統御方向を考慮に入れることで、 α 移動の動機さえ与えれば、殆どすべての文頭構造は自動的に生成されることが判る。

3) 主文の文末構造

文頭構造に比べると主文の文末構造はかなり単純である。問題となるのはいわゆる V-bar 構造である。既に1963年に M. Bierwisch は動詞には分離前綴のみならず、方向規定の副詞句や述語名詞・述語形容詞のように、動詞と密接な統語的關係にある動詞句成分が存在することを指摘している²⁶⁾。これらの成分は周知のごとく、否定テストで動詞だけを切り離して否定できないのである程度検出できる。

72. *Sie geht aus nicht.

73. *Sie ist Studentin nicht.

74. *Sie ist jung nicht.

75. *Er stellt dieses Problem zur Debatte nicht.

76. *Er stellt das Rad in den Schuppen nicht.

動詞にもっとも密接なこれらの成分は基本構造の命題部の末尾で動詞と共に生成され、動詞の痕跡 (tv) によって統語的に直接統御されていると見成される。つまり、動詞と共に V-bar を作っている。しかし、そのテストで検出されるのは、否定テストで検出できる V-bar だけであって、次の例文が示すように、動詞句はさらに細かく [Vⁿ, ……Vⁿ, V', V] と統語的な緊密関係の階層を作っていることが判る。次の例文は動詞だけを否定す

ることもできるから、否定テストでは検出できない。

77. Er hat [_v im Juni [_v die SPD [_v gewählt [_{tINFL/AGR}]]]]].

78. Er hat im Juni die SPD nicht gewählt.

79. Gewählt hat er im Juni die SPD.

80. Die SPD gewählt hat er im Juni.

81. Im Juni die SPD gewählt hat er.

82. *Im Juni gewählt hat er die SPD.

文末構造では、動詞句のこの階層構造 (X-bar 構造) が守られていなくてはならない。

X-bar 構造は助動詞相互の間にも認められる。話法の助動詞が推量や假定など主観的な意味内容で使用されている場合には、必ずそれが [INFL/AGR] の位置に現れ、文末には客観的な意味内容の助動詞が置かれる。その逆に配置すると不適格文となる。

83. Sie soll Sanskrit können.

84. *Sie kann Sanskrit sollen.

主観的な様相の場合、話法の助動詞の時制は現在と過去に限られ、時制の助動詞が使われることはないが、客観的な様相の場合には助動詞がさらに時制の助動詞を伴う。時制の助動詞が加わると客観的な話法の助動詞は動詞として文末に回される。

85. Sie hat Sanskrit schreiben können.

X-bar 構造は統語的に固定したもののばかりではなく、話者の気持ちによって臨時に作り上げられることもある。また、文末の助動詞が V-bar の前に置かれていることもあるが、これらの現象は次の副文の文末構造で考察する。

4) 副文の文末構造

副文では文肢が TOPIK 化されることが少ないので、構造は比較的安

定している。が、主文から副文を生成する際に、後方に移動する定形動詞の着地先が大きな問題となる。通常は最文末の痕跡のある場所 ($t_{INFL/AGR}$) に着地する。しかし、定形動詞が助動詞の場合、直接的に動詞だけを統率する成分ではないことと、Wackernagel-Position で左から右への統御になじんでいるため、動詞句の左側に主語に近く位置を占めようとする。だが、命題文は既に右から左への統御方向で配置されているので、二つの統御方向のあいだの相克が生じ、ドイツ語統語論の複雑な問題の一つを形成する。

この移動が、痕跡位置から左への移動ではなく、COMP 位置から右への移動であることは次の例で示されている。

86. daß er gestern wird₁ haben₂ kommen können $*(t_2) (t_1)$
これを $(t_1) (t_2)$ から移動したと考えると

87. *daß er gestern haben₂ wird₁ kommen können $(t_2) (t_1)$

でなければならないが、これは不適格文である。とすると、まず *wird* が COMP 位置から移動してきて動詞句の左側に着地し、右方統御の原則にしたがって (t_2) の位置の *haben* を右側に引き寄せたか、或は、既に動詞句の左側に前以て着地していた *hat* の左側に着地したかである。何れにせよ、右方統御の始まりである²⁷⁾。

古期ドイツ語や中世ドイツ語では、副文の中で定形助動詞のみならず、定形動詞までもが様々な文中位置に着地して、その都度、濃密な意味単位としての V-bar 構造を作り出していた。副文で、文末の不定詞や分詞の前に定形動詞が置かれていることもあれば、句動詞、目的語の前に置かれていることもある。また、定形動詞・助動詞以外の動詞句成分が統御の方向を変えていることもある。テキストの意味がその都度微妙に違って来るのは、作り出される V-bar 構造のせいである。

英語では、左から右への統御が副文の中でも殆ど完全に行き互ったが、オランダ語では中世ドイツ語と同じように統御方向の一種の混乱が見られる²⁸⁾。学校独文法では、二重不定詞の前に定形・助動詞を着地させること

を規範としている。

88. daß Renate Sanskrit hat lernen müssen.

89. daß Renate Sanskrit wird lernen müssen.

しかし、次の90のように、定形助動詞の前置は現実には二重不定詞の前ばかりとは限らない。

90. damit Renate nicht könnte mißverstanden werden.

以上の例では、定形要素が動詞・助動詞群の前に着地し、それらのグループを左側から右方へ統御することを示したが、それらの動詞に統語的に不可分な関係にある V-bar の成分は動詞群の一部と見成されて動詞グループの中に置かれる。

91. ob sie wirklich hat [Wort halten] können.

方向規定をともなった動詞句、機能動詞句、熟語動詞のようなものは V-bar を作ると見なされるが、4 格目的語や述語名詞、述語形容詞のごとく、どちらとも取れるものがあると、話者の判断によってどちらかに組み入れられる。すると生成された文は話者の独特の V-bar 構造を表す文となってくる。V-bar 構造が統語論と意味論の結び付いた興味深い構造であることが判る。

92. daß ein ehemaliger Nationalsozialist niemals Bundeskanzler hätte werden dürfen.

93. daß ein ehemaliger Nationalsozialist niemals hätte Bundeskanzler werden dürfen.

94. daß er eher einen Roman hätte lesen sollen.

95. daß er eher hätte einen Roman lesen sollen.

α 移動で、正確に定形動詞の着地点を予測するためには、V-bar 構造を始めとするドイツ語の X-bar 構造の解明が必要であるが、未だ統語論的に十分に研究されているとは言いがたい。

本稿では、ドイツ語にも在ると言われているいわゆる能格動詞構文や使

役・知覚動詞などの作り出す文中の統語構造, および *Es fing an, zu regnen / Es fing zu regnen an* のごとく, 右方への枠外移動の問題などは一応除外して, 主として文頭・文末の統語構造だけを考察してみた。そして, 西ゲルマン語には歴史的な文献資料は少ないとしても, ゲルマン語に基本構造として動詞が文頭に立つ非強調平叙文を想定することに依って, ドイツ語の殆ど総ての文頭・文末の統語構造が無理なく生成できることが判った。この基本構造は, Kuhn によれば Wackernagel の法則をゲルマン語内で修正することによって得られるものである。

* 本稿は昭和62年10月16日, 京都市で開かれた日本独文学会秋季研究発表会における口頭発表に加筆したものである。席上で貴重な御意見を戴いた野村康幸氏, ならびにドイツ方言につき教えを戴いた B. Neumann 氏に感謝する。

註

- (1) Der große Duden in 10 Bänden. Bd. 4. Grammatik. S. 498ff. Mannheim, 1973³.
- (2) cf. Radford, A.: Transformational Syntax. A Student's Guide to Chomsky's Extended Standard Theory. Cambridge 1981.
今井邦彦編: チョムスキー小事典, 東京, 1986。
- (3) cf. 井口省吾: 浮き彫りと反転。In: ドイツ語学研究 1, 97 ff. 東京, 1985
Thiersch, C. L.: Topics in German Syntax. Diss. MIT 1978.
- (4) cf. Dowty, D. R. et al.: Introduction to Montague Semantics. Dordrecht (Holland) 1981 (邦訳は井口他, 東京, 1987)。白井賢一郎: 形式意味論入門。言語・論理・認知の世界, 東京, 1985。
- (5) Abraham, W. (hrsg.): Erklärende Syntax des Deutschen. Tübingen 1985.
- (6) Der große Duden in 10 Bänden. Bd. 4. Grammatik. s. 625.
- (7) Lenerz, J.: Zur Generierung der satzeinleitenden Positionen im Deutschen. In: Kohrt, M./J. Lenerz (hrsg.): Sprache. Formen und Strukturen. Tübingen 1981.
- (8) 但し, 下の表は Olsen, S.: On Deriving V-1 and V-2 Structure in German. In: Toman, J. (de.): Studies in German Grammar. Dordrecht (Holland) 1985. に依った。
- (9) Lenerz, J.: Zur Theorie des syntaktischen Wandels. Das expletive es in der Geschichte des Deutschen. In: Abraham, W. (hrsg.): Erklärende Syntax des Deutschen.
- (10) Reis, M.: Satzeinleitende Strukturen im Deutschen. In: Abraham, W.

- (hrsg.): Erklärende Syntax des Deutschen.
- (11) Reis, M.: loc. cit.
 - (12) cf. 手嶋竹司: 古代ゲルマン語の Wortstellung に関する一考察, 信州大学人文科学論集第5号(1981)。新保雅浩: 古高ドイツ語における定動詞の位置について筑波大学言語文化論集第5号(1978)。高津春久: 中世ドイツ語散文の定動詞位置の研究, 昭和55年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告(1986)。
 - (13) Behagel, O.: Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung. Bd. IV. (1932).
 - (14) Wackernagel, J.: Über ein Gesetz der idg. Wortstellung. IF. 1. (1982).
 - (15) Hirt, H.: Geschichte der deutschen Sprache. München 1925.
 - (16) Kuhn, H.: Zur Wortstellung und -betonung im Altgermanischen. PBB. 57 (1933).
 - (17) cf. 手嶋竹司: 古代ゲルマン語における副文の成立。信州大学教養部紀要人文科学第11号(1977)。Teshima, T.: Eine entwicklungsgeschichtliche Untersuchung über die Entstehung der Konjunktion in den altgermanischen Sprachen. 信州大学教養部紀要第13号(1979)。
 - (18) 例えば Otfrid: Evangelienbuch の定動詞の位置。
 - (19) Kuhn, H.: loc. cit.
 - (20) Curme, G. O.: A Grammar of German Language. 1960².
 - (21) Fanselow, G.: Konfiguralität. Tübingen 1987.
 - (22) Leisi, E.: Das heutige Englisch. Heidelberg 1974.
 - (23) cf. Lockwood, W.B.: Historical German Syntax. 1968.
 - (24) Berlin, Schlesien, Rheinland などの方言。
 - (25) cf. Paul, H./H. Moser/I. Schröbler: Mittelhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1969.
 - (26) Bierwisch, M.: Grammatik des deutschen Verbs. studia grammatica II. Berlin 1963.
 - (27) 方言に見られる語順: Wenstes nech west lin (wenn du nicht lernen willst) (Schlesisch)
 - (28) オランダ語に見られる交叉構文の例: dat Jan Piet Marie de kinderen zag helpen laten zwemmen (=daß Jan Piet Marie die Kinder sah helfen lassen schwimmen=daß Jan Piet Marie die Kinder schwimmen lassen helfen sah) 主語・目的語などの語順と動詞句内の語順の統御方向が喰い違っている。これを形式的に変形規則で書き表わすことは、そんなに難しいことではない。長谷川欣佑: 言語理論における「変形」の位置(月刊「言語」1989, No. 2) 参照。